
復讐のメシア

クガネ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

復讐のメシア

【Nコード】

N1073E

【作者名】

クガネ

【あらすじ】

そのへんにいる高校生の俺がミルタニアという世界に足を踏み入れた。しよっぱなから生首？いやいや、生きてます。でもなんで俺がミルタニアに来たのか。たぶん、たまたまだ。

プロローグ（前書き）

このお話は予告なくグロテスクだったり人が死んだりします。ご注意ください。

復讐のメシア

プロローグ

ここは世界のどこか。暖かな風が窓をくぐって老婆の頬を撫でる。季節は春。一世帯の家族が住むには十分な家の庭には、老婆が植えたたくさんの花が咲き誇っている。

その傍らでは三人の子供たちが土にまみれて遊んでいた。少年が二人。少女が一人。春の陽に負けないくらい眩しい笑顔で、老婆の代わりに花の世話をしている。

高齢である老婆は花の世話をするにも一苦労であった。子供たちへの報酬は、老婆が実際体験したという約100年前の出来事ミルタニア転換期と呼ばれる歴史の中で起こった出来事を語ることだ。

「おばあちゃん！ 雑草は刈ったからそろそろお話してよ！」

「わかったから。手を洗ってらっしゃい。クッキーを焼いたから、お茶でもしながら話しましょう」

「よっしゃあ！」

子供たちは慌ただしく手を洗いに部屋を出て行った。途中、遅れがちな少女が机の角に頭をぶつけて、少年たちに笑われていた。

老婆は苦笑して、その姿を見送る。

そして、お茶の準備のために立ち上がった。

さて、何から話そう？

そうだ、あの人がこのミルタニアに来たときの話から始めよう。

オープニングにはうってつけた。

あの人はなんて言ってたっけ？

そうだ、始まりは雪国だと言っていた。

老婆は年を重ねるにつれ、記憶力は低下していたがあの人の話は決して忘れないでいた。そして、長いようで短かった旅の苦楽を共にした仲間たちのことも覚えている。

自分の名前は忘れたとしてもあの頃のことだけは死ぬまで忘れな
いだろう。

今、仲間の中で生きながらえているのはおそらく自分だけだった。老衰で亡くなった者。病気で亡くなった者。事故で亡くなった者。その後、新たに旅立って行方不明の者。居場所が知れない者。あの世に行かない限り、二度と会うことはない。

だから、老婆は語ることを止めない。
忘れないでほしい、たくさんの人たちのために戦った者がいたことを。

誰かのために涙を流した者がいたことを。

「おばあちゃん」

少女がオレンジジュースと紅茶が入ったカップを持って、老婆に笑いかけた。

「用意してくれたの？」

「うん。だって早く聞きたいから」

「そうか、ありがとう。じゃあお前だけ、特別に私の秘密を教えてくださいよう」

「何々？」

特別、という単語に少女は興味津々だ。目をキラキラさせて、身を乗り出しそうだった。

「実はね、私は彼のことが好きだったの」

「ええー！ 彼ってあの人のこと？」

「そうだよ。その時は気づかなかった、私にそんな感情があったなんてね」
「わあ！」

恋の話となると、女の子は活発になる。
少女は細かい話が聞きたかったが、邪魔が入ってしまった。

「何話してんだよ！」

手洗いに失敗したのか、服を濡らした少年が二人の間を割っている。その後ろで、別の少年が好奇心に目を輝かせて老婆を見ていた。

「内緒の話だよ」

「おとめのひみつ！」

老婆の後に、少女が悪戯っぽく笑いながら言った。

「つまんねー！ ってかばあちゃんはおトメって年じゃないだろー！」

「女の子にそんな酷いこと言っちゃダメ！」

「ちよ、二人とも喧嘩しないで」

騒がしいが、老婆にとってそれが幸福の象徴だった。老婆は手を叩くと、子供たちに言った。

「さあ、お話の時間だよ」

1：オープニング

天地がひっくり返っても俺のような状態になった奴なんて絶対に存在しないと断言してやる。大袈裟でもなんでもない。これほど奇妙で、不可思議で、間抜けな様はかつてなかっただろう。

俺 ノヒトは混乱しすぎて何から説明すればいいのか判断することができない。強いて今の心情を説明すればなんでどうして真っ白だよ思考も真っ白だけど周りも真っ白だよどうしてですか といったところだろう。

俺は今まで家で寛いでいた。

普通なら学校に通わねばならない時間であったが長期休暇というかつまり冬休みの最中だったのだ。

俺が通う高校は進学校でも普通科でもない工業やら農業やら産業やらの専門的なコースしかない高校で、あまり頭がよろしくないあんなぼんたんたちが揃うわけだから冬期休暇の課題はさっさと片付けられる量そしてレベルなのだ。というわけで課題内容が知らされた時点で休暇に入る前にさっさと終わらせた俺は友人と遊ぶなり家でテレビゲームなりして暇をつぶしていたのだった。

課題とかはよく毎日こつこつやらねば意味がないと大人の方々に言われるが俺には関係ない。程度の低い学校に通う割には頭はいい方だし。

本題からかなり離れてしまった。俺はつまりこれまで普通の生活を普通にたしなんでいたのだ。

だから俺は見上げても電線も飛行機も人工衛星もない空も、白く染められた山々も、それこそ見渡す限りの鉄も油も見当たらない雪景色も、先ほどからこつこつを睨むどでかい狼っぽい生き物とも関係な 狼？

「う、こんにちは……」

我ながら情けない声色でよくわからない生き物さんにご挨拶。ほら、最初が肝心つてやつ？ 第一印象が大切つてよく言うじゃん。狼さんの眼光が鋭くなってきたのは気にしない。テレビ番組とかでよく見る動物の生態とかのコーナーで見た獲物を狙うワニの目とそっくりなのは気のせいだ。

正直逃げたい。だが体が動かん。ピンチに陥って精神的に動けないとかじゃなくて物理的に動かない。

何故つて俺は情けないことに不本意ながら首から下が雪に埋まっているからだ。一見すると生首が銀世界に放置されていてそれがまばたきしているかんじだ。

しかし俺の体は大丈夫なんだろうか。結構雪に埋まってるみたいだけど壊死とかしないよな。感覚ないんですけど。

しかし後頭部に凄い違和感がある。なんていうの？ 霜焼けみたいにむず痒い。冷気にも似ている。これは狼さんの殺気なのか。

絶体絶命というやつだ。

獲物として狩ることを決断したしたのか狼さんが俺に向かってくる。

速い、あいつチョー速い。もうどうすることもできない。

俺は気を失った。

簡潔に言おう。

俺は目を覚ました。

自分でもびっくりするくらい突然覚醒した。こんなにはつきりした状態で起きたのは朝帰りの父さんが酒臭い息を俺の鼻先に吐きかけてきたとき以来だ。懐かしいな けっこう前だったかな。

しかし後頭部の感触が柔らかいな。

自室の見慣れた白い天井がまず視界に入るはずだが、何故か幼い頃に親戚の別荘で見たログハウスの天井をボロくした光景が真上にある。

「あれ、起きたん？」

馴染みのない妙なイントネーションがある言葉と一緒に、茶色い天井から白い人間の顔にすり替わった。

「ぎゃあああああ！」

びっくりした。

覚醒したとか言いながら結構寝ぼけていたようで、人の気配を全く感じていなかった。

「人の顔見て悲鳴あげんなよ、失礼な奴やな」

白い顔はよく見ると赤毛の少年だった。年は中学生くらいかそれ以下に見える。白すぎる顔に、まるで茶色いガラス玉をはめ込んだような瞳が印象的だった。

ボロいが大きなマントを羽織っているためよくわからないが小柄そうだ。

顔立ちからして日本人ではないな。しかし日本語がうまいってか何弁？

「しっかし兄ちゃん危なかったなあ。覚えてる？ あんた魔物に襲われそうになってたんやで。あ、シチュー食うか？ 寒いやる？ 何せ雪に埋まっつつたんやからな。生きとる生首見つけたときはビ

ビッたわ。あんたよう生きとつたな」

よく状況を理解できていない俺をほつたらかして少年は語り出す。
てか今何つた？ 魔物？

「魔物、つて？」

「僕はキョウウヨウってのがないから魔物の種類まで答えられやんよ。
たしか頭がライオンで胴体が山羊で尻尾が蛇やったな。ああ、そう
か、体埋まつつたから見てないんか。あんた、後ろから狙われと
つたんやで」

少年は俺の質問の意味を誤解した。
いやいやそういう意味じゃなくて。

「八チが助けてなかったら今頃魔物の腹ん中やったな。ああ、八チ
つてのは今あんたが頭に敷いとるやつやよ」

「頭？」

もさもさした感触が頭の裏にある。確認してもいなかったが俺は
勝手に毛布が何かかと思っていた。

その感触を頭で何度も押しながら考え込んでいると、それが突然
「ぐう」と唸ったもんだから俺は飛び起きた。

「生き物が！」

しかも狼でした。いかにも獰猛な面構えが健在だ。うーん。近く
で見ると傷跡がたくさんあってこれまでの凄まじい戦歴が伺える。

「ぎゃあああああ！」

俺は悲鳴をあげた。自分より年下のやつが平然としていたって構わない。

怖いもんは怖い。

だってこいつさつき見た狼じゃん！

俺は少年を盾にした。

「兄ちゃん、失礼やぞ！ 八子は兄ちゃんを魔物から助けたんやで」
「魔物って……」

もう魔物がどうとかどうでもよくなってきた。少年は居て当然みたいな言い方するし。

きつと最近流行ってるポリゴンクエストの影響を受けているんだろう。

そーかそーか。そんなにポリクエが好きか。でも魔物とかモンスターとか実際に居ないんだぞ。

この家に電気機器が見当たらないのは無視だ。
家っつーか小屋？なんか山のふもととかにありそうだ。

薄汚れたレンガでつくられた暖炉の中で炎が薪を燃やしている。炎の上で大きな鍋が蓋をされて泡をたてている。そのそばに敷かれている不規則な形の絨毯はもしかしたら本物の毛皮かもしれない。

窓は一つだけ。外は雪景色だった。

この少年はこの貧相な小屋で生活しているのか。

「シチューな、さつきとった獲物を材料に作ったんや。食うか？」

赤毛の少年は木製の茶碗（こんなのはあちゃんちでしか使ったことねえ）に肉しか入っていない白いシチューを差し出してきた。飾り気はないがなかなかうまそうだ。

一言礼を言い、俺はこれまた木製のスプーンであったかいシチュー

をいただいた。

「うおえっ！」

そして即吐いた。

「やっぱりか」

スープはうまかった。ただ肉がなんとも言えないお味でした。先に述べておくと俺は肉の脂身が大嫌いだ。シチューの肉は完全に火は通っているようだが、肉なのに納豆のような食感だった。脂身よりたちが悪い。

やっぱりかって何だ、やっぱりかって！

「あんたを狙ってた魔物を具にしてみたんやけど、あかんみたいやな。珍しい魔物やったからもしかしたら思たんやけど」

少年は悪びれもなく言う。すると何か？もしかしたら俺

「実験台か！」

得体の知れない肉を口にしてしまった。

しかしスープはうまかったからスープだけ飲んだ。肉はよけて。

「ごちそうさまー！」

「よう食うな兄ちゃん」

少年は今でもちまちまシチューを口に行っている。俺は腹が減っていたから大盛にしてもらったが、狼は鍋の大半を食らった。

「さて、腹も膨れたことやしあんたのことについて詳しい話がいんやけど。名前聞いてなかったな、僕はノア」

俺はノアの箱舟を思い出した。ノアっていうとおじいさんのイメージがあるから少し違和感がある。

「ノヒトだ」

「ノヒトってどっからきたん？ 身なりからして旅人とちゃうよな」

俺は自分の服装を認識していなかった。半袖Tシャツに丈の長いズボンという全体的に黒っぽい完全に部屋着状態だった。

ここではそんな服装では通用しないらしい。思わず身震いした。

ノアは暖かそうな茶色いコートではなくてマントを貸してくれた。

「色々ありがとうな」

会って一日も経っておらず、しかも名前を知って一時間とたっていないのにも関わらず親切な対応をしてもらい、流石の俺も恐縮だ。

「これ、父ちゃんのを」

「そっぴい親は？」

いてもおかしくない年齢なのだが、そんな様子は一切ない。

「おらん。家族はハチだけや」

「そっぴい」

親がおらん子どもってのは一大事なのだがノアがあまりにあっさり言うからそう返すしかない。

2：現実 is 厳しい

ノアは俺の心情など全く気にせず、少しだけ真面目な顔をして言った。

「まあ僕の話は置いて。あんたはどっから来たん？ この近くにある村といえばバルツ村しかあらへんけど」
「バ、バルツ村？ どこだそれ？」

日本の地名とは思えない単語が飛び出してきた。

俺は自分が持ち合わせている常識に従った素直な反応をしているのにノアは心底不思議な顔で俺を見た。

「違うんか？ このあたりで徒歩で行けんのはやつとバルツ村ぐらいやで。あんた、なんかに乗ってきたんじゃないんやろ？」

お前はバルツ村の住人ではないのか。だとしたら旅人か。旅人なら何故武器を持ってないのか。荷物もないのか。ノアにはそんなことを聞かれた。

しかし俺はどの質問にも正確に答えることはできなかつた。

当然だろ？ 旅人とか武器とかまったく馴染みのないことばかりが当たり前のように会話に出てくるんだから。

困ったことになつたぞ。

俺はある結論にたどり着こうとしていた。

しかしそれが事実だとすると、俺は

「雪の中で生首になつた男」の他に素晴らしく非常識的な称号をいただくことになる。

「バルツ村の住人だとしても、僕のこと知らんみたいやしなあ……

「二回目になるけど、あんたどっから来たん」
「日本だ」

普通ならここで誰もが違和感を覚えるだろう。例えるなら東京から来た人間が、北海道で現地の人にどこから来たのと聞かれて日本ですと答えるようなものなのだから。

俺はノアが
「そんなんわかつとるわ！」と近畿方言で叱り飛ばしてくれることを願う。

「どこやそれ」

ああ、やっぱり。

現在あんたが話しているのは日本語だぞ。

「小さい島国だ」

嘘は言っていないが、的確ではない答えだ。

俺はこことは違う次元の日本という小さい島国からやってきました。

これが一番あっている。

「そんな国あるんかあ。一応この辺りの地図はあるけど、世界地図は持ってないから知らんだ」

世界地図のどこを探しても無いだろう。

「地図、見せてくれ」

もしかしたら、知っている地形かもしれない。俺はそれが確かめ

たかった。

「ええよ。でももう暗いから明日な。地図は倉庫にあるんや。あんなの分の布団も倉庫から出さなならんけど、地図探すのはまた明日な。布団運ぶの手伝ってや」

「ありがとう」

寝ることになった。色々気になるが、俺は眠気に従おうと思う。呑気に就寝しようとしているがよく考えたらかなり受け入れがたい状況に陥っているではないか。

もし、もしもだ。

これが大掛かりなドッキリでいきなりカメラ持った人が出てきたら。

ノアが仕掛け人でネタばらしのときに

「ホントに別世界に来た思ってたんか？ サマイ兄ちゃんやなあゲームのしすぎ漫画の読み過ぎやで」とか言われたら俺かなりの痛い人だろ。

俺はこの先何があるかと、不可思議なものは信じない。

そんな恐ろしい事態になっては今後の私生活に関わるだろう。

そう、これは夢。すごくリアルな夢なんだ。

この頬を叩かれる感触も、ノアの白い顔も。

「ノヒト」

ノアが俺を呼ぶ。

夢だ、夢！ 俺を起こすのはいつも朝帰りの父さんの酒臭い息か、妹のヒップドロップなんだ。

「さっさと起きんかい！」

初めてだ……、年下にビンタされたのは初めてだ。
夢ではなく現実だった。

昨日以上の肌寒さから、早朝だということが伺える。しかし暖炉には暖かい火が灯っているため耐えられないほどではない。

「あとちよつと寝かせて……」

「あんた、人んちに泊まっとるってこと忘れてへんか」
「……」

そう言われたら従うしかない。

というかまた八手を枕にしていたことに気付いてしまったから起きるしかない。怖いから。

「ホントなら、放り出しとるところやで」

まあそうだろうな。

見ず知らずの人間に毛布も食べ物もくれる奴なんていないだろう。日本なら、まずあり得ないな。

「あんたは多分、魔物に襲われたショックでいろんなことを忘れたんやと思う。そんな身軽な格好でここまでこれるとは思えやんというわけで、はい」

そう言ってノアは両手で持てるくらいの黒い巾着つぽい袋と、昨日のマント、そして重たい飾り気のない剣を渡してきた。

「なんだこれ」

尋ねる暇もなく、ノアに背中を押されて俺は外に出た。野外は室内より格別に寒かった。身震いしたとき、後ろから木が軋む音が聞

こえる。

「さいなら、ノヒト」

ノアからいきなり別れを告げられた。急展開に目がやっつと覚めた俺は狼狽して、怒鳴るようにノアに問うた。

「どつという意味だよ！」

「あんたはきつとバルツ村の人間や。地図と方位磁石持たしたから、それ頼りにバルツに行きい。途中まで八チに案内させる！」

ノアは勘違いをしている。バルツなんて知らない。行ったところでどうにもならないだろう。

慌てて扉を開けようにもノアが中で押さえつけているのか開かない。

既に外にいる八チが俺のズボンの裾を噛んで阻止しようとしてくる。

「無理無理！」

極寒の地で土地勘のない人間独りと狼一匹でどうしろと。

「パンぐらいは入れといたったから。後は自分でなんとかするんやな！ 言っとくけど、僕は優しい方やで？ でも自分だけで精一杯なんや。がんばりいや。あはははは！」

ノアは本気だ。もう頼れるものは狼だけになってしまった。それに最終的には八チもノアのもとに戻ってしまっだろう。

こうなったらとにかくバルツとかいう村に行くしかない。

俺が諦めたと察したのか、八チがゆっくりどこかに歩を進めてい

く。

俺は八手を道しるべにバルツを目指した。
世話になったな、ノア。

ノヒトはノアに別れを告げた後に気付いた、靴をはいていないことに。

いくら防寒したって素足で雪の上を歩いたら寒いどころか霜焼けより酷いことにな　ってしまふ。

出発数秒後、ノヒトは再び戸口に泣きついた。

「ノア！」

「なんや、まだおつたんかい！」

ノアはノヒトの情けない呼びかけに呆れつつも返事を返した。

忠犬ならぬ忠狼八手は尻尾をピンと張ってノヒトを待つ。動物にわかりやすい表情があったなら

「まだ？」と顔をしかめるに違いない。

「靴無いんだよ！　なんでもいいからなんとかできねえ？」

気付いてから足が冷えてきたらしい。ノヒトは激しく足踏みしたり手で摩擦しようとする。

が、大自然にそんなことで抵抗出来るわけがない。

足元から体温が奪われていく。もうとっくに霜焼けになっているかもしれない。

雪に埋まっても平気だったのに！

ノヒトはその思いでいっぱいだった。

「ほんとに世話が焼けるなあお前！」

ノアがキツく咎める。

他人の世話から解放された喜びの直後にまた手を煩わさせられて若干頭に来たらしい。

しかしわざわざノヒトを拾って介護したくらいだ、手を打ってくれるらしい。寂しいことに扉は開けてくれないが。

「倉庫開いて右に、ブーツがある。父さんのやけど、やるわ」

「え。いいのか？」

それならいわゆる形見というやつだろう。

年下にも関わらずノアに頼ったノヒトだが、遠慮の気配をよつやく見せる。

「ええよ。っていつかさつさといけ！」

よつぽどノヒトがやかいらしい。扉の向こうから苛々とした気配が伝わってくる。

ノヒトは若干寂しさを感じつつ一言礼を言って去っていった。

亡くなった者の遺品を使うのには気が引けるが、ノヒトはありがたく使わせて貰うことにした。

「また返しに来るから」

「ええから行けよ！」

倉庫の扉を開閉する音と、人間の足音が遠ざかっていくのを確認して、ノアは安堵した。

壁に身を預け、しゃがみこむ。

そして誰もいない家の中で、呟いた。

「返しに来る？ どうせ戻ってくるわけあらへん」

確信めいた口調で、ノヒトを非難する。
それがどういふことなのか、今は本人しかわからないだろう。

「人間と話したんは、久しぶりやな」

そして唯一の窓から、ノヒトと相棒の八子が雪景色のなかで浮かんでいるのを意味もなく見る。

「僕、うまく話せたかなあ？ はよ帰ってきて、八子」

ノアは茶色いガラス玉のような瞳を伏せた。
キラキラしていた少年の目は、外界からの光を遮断される。

3：追い出されたり追いかけられたり

白銀の世界の中に、茶色い者が浮いていた。

大狼の八手の案内に従って、ノヒトは雪山に深い足跡を作っていた。

しかしマントを被っていてもとても寒さを凌げることはできない。バルツ村とやらは、いったいいつになったら見えてくるのか。

そう問いたくても、人ならざる八手が答えてくれるはずがない。

いい加減つまらなくなってきたノヒトは、赤毛の少年、ノアから貰った巾着を漁ることにした。

ノアの小屋から出発して一度たりとも中身を確認しなかったのだ。中には赤っぽい色をしたお茶が入った水筒と、1日くらいは過ごせそうなパンがはいっていた。

ノヒトは中に入っていた質素なパンをかじった。

「かつてえ！」

しかし堅かったので、噛みちぎるしかなかった。

水筒の中身のお茶は、冷えていたが飲んでみると体の芯から暖めてくれた。

なんとという茶葉なのだろうか。

ノヒトは八手にもパンを分けた。口元に持って行くと手まで喰われそうだから、八手の近くに落としたりした。

「お前、腹減っても俺を喰おうとか思うなよ」

ノヒトはこう言つが少年と暮らしていた狼がノヒトを喰うはずがない。

八手は、口をもしかもしや動かしながら不思議そうにノヒトを見

上げた。

「お前、よく見ると可愛いかも」

伝わっているのかいないのか、そのあたりの判断は難しいが、ハチは鞭のような尻尾をノヒトの膝裏に叩きつけた。

意外な攻撃に、ノヒトはヒザカツクンされた人のように跪く。

「そうか……お前はオスなのか」

勝手に解釈するノヒトだった。

半日ほど歩くと、急な坂は緩くなっていった。山麓なのかもしれない。

ノヒトは日が暮れる前には到着してやろうと、足を早めた。しかし慣れない雪道にすぐ疲労し、動きは鈍くなっていく。

どこか休めるところはないものかと、思考しながらあたりを見回した。

「ん？」

途端に、何かに気づいたように先を見据える。

ノヒトの耳には水音 間違いなく川のせせらぎが聞こえていた。

「ハチ、狼だからお前もわかるだろ？ 川の音だ。俺、昔から五感がいいんだ」

この音はノヒトとハチ以外には聞こえないだろう。いくら静寂に包まれた雪山でも、僅かな川のせせらぎなど普通の人間が聞き取ることができないはずの距離があった。

思った通り、しばらく進んだら細い川が流れていた。水は濁りもなく透き通っていて、小魚が何匹か自由に泳いでいた。

ノヒトは川と雪を隔てる岩に腰を下ろし、息をとることにした。重たい剣は持っていて疲れるのでそのへんに立てかけておいた。八手は小魚を捕って食べている。大食らいにパン一切れは少なかったようだ。

ノヒトは見慣れない大自然を横断する小川を、じっと見つめた。

ウーツ

「な、なんだ？」

ふと、甲高いうなっているような声が川上から聞こえてきた。

ノヒトは立ち上がり、川上にじっと目を凝らす。

川上の中央に何かがあった。それは耳がうさぎのように長く、亀の甲羅のような体をしていて、ぶっちゃけ亀の中身が白いうさぎにすり替わった動物がくるくると川の流れに翻弄されているのだ。得体の知れない動物の出現に戸惑ったノヒトは、八手がそのウサギのようなカメ略してウサギガメを食べてしまわないうちに川から拾い上げた。

水に濡れたウサギガメは氷のように冷たく、とても素手では触わることができない。ノヒトは水気をマントで拭いてやった。

「ウーツ」

ウサギガメは人間であるノヒトが怖いのか、それとも寒さで凍えているのか震えている。尻尾まで白うさぎだった。

どことなく愛嬌があるそれをどうするか、ノヒトは悩んだ。

このままこの不自然な生き物を自然に返してやるか、それとも連

れて行くか　しかし連れて行く理由もないので、ノヒトはとりあえずその場に放置してさっさと先に進むことにした。

少しだけどういった生き物なのか、気がかりというか興味があったがよくわからないので何かよからぬ事が起きる前に忘却の彼方に追いやってしまおう、といった具合だ。

「ウーッ」

岩の上に離してやり、ノヒトは剣を拾って立ち去ろうとする。ウサギガメが鳴こうが関係ない。

「ウーッ！　ウーッ！」

まるで置いていかないで！　とでもいうようにウサギガメが鳴く。川から八チが這い上がり、ノヒトの隣に並ぶ。それでもノヒトはウサギガメを無視して行くが

「ウーッ！」

「ガウ」

「ああもう、わかった！　わかったよ！」

八チにまさに置いていくの？　と問いかけてくるような目で見られノヒトはついに折れた。

なんだか役に立ちそうにない生き物が仲間に加わったのだった。ウサギガメの歩行速度は亀のごとく遅いので八チの背中に乗せることにした。

歩いてはたまに休憩し、また歩く。雪山ではそれでも疲労していく。

雪道に体力を奪われ、半日たった頃、ノヒトの無駄に良い耳が人為的に生み出された音を聞き取った。

木がきしむ音、人の笑い声、こちらに向かつてくる足音　村だ。

「バルツか？　よかつたな。八ちも少しは休んでいけよ」

ノヒトようやくく見えてきたゴールに、顔を輝かせる。しかし、案内役の八ちはウサギガメを降ろし、ノヒトから後ずさる。

動物の表情なんてノヒトにはわからないが、どことなく寂しそうにみえた。

「八ち？」

「フェンリル！」

呼びかけた瞬間、重い足音とともに耳を押さえたくなるような濁声が辺りにこだまする。

振り返ると髭面の老けた男がいた。手には大きな斧を持ち、どうみても穏やかな雰囲気ではない。

「てめえ、村を襲う気か！　化け物め！」

「ちよ、ちよつとまでよオツサン！」

ノヒトの制止も聞かず、あろうことか男は斧を振り上げ、八ちに襲いかかった。

八ちは素早くそれを回避し、追い討ちをかけられる前に来た道を引き返し逃げていった。

男は追ってきたが、ノヒトは捕まることはなかった。雪道に慣れているであろう人間には、例え足を痛めていようが追いつかれると思っただが、五十を過ぎたと思われる男には、十代の少年に追いつくことさえままならないようだ。

途中で振り返ると、男が現れる様子は少しもなかった。

「疲れた」

ノヒトは息を切らせてそう呟く。が、あまり声にならなかった。しかし目的地はすぐそのこと判断したのか、休憩する素振りを見せず、前に向き直ると歩き出す。驚異的な体力だ。

しばらくすると、質素な民家が数件見えてきた。

田舎で見るような木造で、車なんかがぶつかっただら木っ端みじんになりそうだ。

民家だけでなく道具屋、そしてなんと武器屋まである。看板は電光掲示板ではなく板に文字を書いて店先に吊してあるだけ。

ちなみにどの文字もノヒトには読めない。全てロゴマークで判断した。

見慣れない光景に、ノヒトはここが故郷でないということに自覚させられる。

ってか思いっきりロープレの世界だな。

そんなことも思った。

ふらふらとあてもなくさまよっていると、猫背の杖をついた白髪の老婆に声をかけられる。

「あんだ、さつきからふらふらしてるが、どうしたのかい？」

「……え」

まさか話しかけられるとは思わなかったノヒトは、うつかり声を裏返した。

「見慣れないからなあ、目立つんだよ」

「ついさつきこの村に来たばかりなんです」

「旅行かい？ こんな辺鄙な村に独りで」

「いや、なんとというか。来たくて来たんじゃないわ」

ノヒトがそこまで言って、それからどう説明しようか考えあぐねたとき、老婆は

「アッ」と声をあげた。

彼女のしわくちゃな顔は、明らかにウサギカメの方を向いていた。

「あなた、まさか研究所の人間かい？」

「ち、違います」

つい先ほど、同じような展開になった。ノヒトはウサギカメを抱え直し、いつでも逃げられるように警戒をした。

「それは村はずれにある、研究所のものだね」

「そうなんですか？ 川で溺れているのを助けたんですが」

「きつと脱走したんだろうね」

この老婆の様子をみると、あの勘違い野郎のようにいきなり襲いかかってくるようなことにはならないようだ。

もっとも、喜寿はとつくにこえているだろうこの老婆に、ノヒトが逃げ切れないわけがないが。

「でしたら返したいのですが、その研究所の場所を教えてくださいませんか」

命あるものを拾ったからには見捨てるわけにはいかない。責任を持つて元の場所に帰してやろうとノヒトは考えた。

はたしてそのキマイラ研究所とやらに帰ってこのウサギカメが幸福であるのか？ そんな疑問もあったが。

「おやおや。珍しく誠実な若者だね。研究所は村を出て南にあるバ

ルツ溪谷にあるよ。ヴォルフって男が経営してる酒場がある方が南口さ」

「南ですか。ありがとうございます」

「その前にうちに来ないかい？ 見たところ山を越えてきたようだし、疲れただろう？ 休んでいきな。バルツには宿屋はないからね」

「どうやら老婆はノヒトを自宅に泊めてくれるらしい。これは嬉しい申し出だ。しかし、一つ問題があった。

「ありがたいんですが、お金とかお礼できるような物を持ってないです」

ノヒトが今所持しているのは、ノアから貰った固いパンと赤いお茶が入った巾着と、飾り気のない剣のみだった。

金目のものはない。

「金がないなら尚更さ。いいんだよ。ただのあたしの好意さ」
「いいんですか？」

ノヒトは老婆の言葉に甘えてしまおうかと思ったが、つい先ほど見知らぬ人間に襲われたばかりだからか、老婆を信用しきれず이었다。

「困った時はお互い様。あたしゃルイージャってんだよ」
「俺はノヒトです」

「なんだか休んでばかりのような気がするが、ノヒトはルイージャの家にお邪魔することにした。」

4：ルイージャ

ルイージャというお婆さんのお蔭でやっとまともな休息がとれそうだ。

老婆一人住むには少し広いくらいの質素なログハウス風の家に招き入れられる。薪がくべられているが火が灯っていない暖炉が目立つ部屋。そのそばに俺が両手を広げたくらいの長い机に椅子が四つ添えてあった。

ルイージャの誘導で暖炉に近い席に座る。

「暖炉はすぐ灯すからね。それまでこのお茶を飲むといい」

そう言っつてルイージャが出したのは、赤色の透明な液体が入ったカップだった。

一口飲んでみると、体の内側からぽかぽかしてくるような感覚が広がった。

これはノアからもらった水筒の中身と同じ物かもしれない。

「これは……」

「バルツィアという薬草で作ったお茶だよ。極寒の地で白い花を咲かすんだ。葉はとてもキレイな赤色をしているんだよ。冷たくても体を温めてくれる」

「このあたりの名産物なんですか？」

「そうさ。でも今年は前年より少し暖かくてね。栽培できたのはいつもの七割くらいさ」

「暖かい方なのか！」

日本の中部出身である俺にとってここは極寒である。

「ウーツ」

ウサギガメが俺の膝の上で鳴いた。ルイージャはそれを聞いてウサギガメが腹を空かせていると判断したのかパンの耳を与えた。こいつの主食は判然としないが、餌はパンの耳で決定だ。

ルイージャはパンの耳を細かくちぎってウサギガメに与えた後に、ピンク色の団子を二つ持ってきた。拳ほどの大きさで、それを俺に差し出す。礼を言い受け取った。

味見するようにかじるともちもちとした感触と共に甘味がほんのり舌のに広がった。うまい。

これも原材料はバルツィアらしい。バルツィアはどんな加工をしても体を温める効果はなくなるので、シチューにしたりお菓子にしたりと村人は色々なアレンジをしている。

世話をしなくても勝手に成長して花を咲かすため、栽培しやすい。そして寒ければ寒いほど栽培できる薬草。都合がいい食料だ。

主に東北の山に生えるらしい。

「東北の山といえば、あの子が居るはずだね」

「もしかしてノアのことですか？」

「そうさ。やっぱりあんた、ノアに会ったことがあるんだね」

彼の名を口にしてまた敵意を向けられるかと一瞬思ったが、ルイージャはそんな素振りを見せずどこか　そう、懐かしむような眼で俺を見た。

「そのブーツはアルバートのものとそっくりだったからね。もしかや、と思ったんだ」

ノアはこのブーツを父親の物だと言った。アルバートというのは父親の名だろうか。

「遭難しているところを助けてもらいました。それでいろいろと」「アルバートの物をあげたということは、諦めたんだね……ノア」

ルイージャは悲哀に満ちた表情で視線を遠くにやる。

諦めた？ ということはアルバートという人は蒸発したか、ノアの知らぬ間に死んだということなのだろうか。深い事情がありそう
だ。

聞いてもいいのだろうか。流れからして、聞いておいた方が良さ
そう
だ。

「聞いてもいいのですか？ アルバートさんというのは？」

「ノアの父親さ。三年前に居なくなつたのさ キマイラ研究所へ
と連れられてね」

「それは、どうして？」

「話せば長くなるよ？」

「かまいません」

聞いてどうするといふのだろう。自分でもわからなかつた。

遡ること三年前、早くに母を亡くしたノア少年は父のアルバ
ートと二人で暮らしていた。アルバートは一日中木こりとして労働
を、ノアは幼いながらも家事をしなければならなかつたが、二人は
幸せに暮らしていた。

その頃、村のはずれにキマイラ研究所という施設が出来た。そこ
は生き物と生き物を特別な機械 キマイラ生成機で合成し新種の
生き物をつくり出すという研究が行われていた。

その目的、キマイラの用途は一般市民に詳しく説明されていない。
生命の新たななる可能性の研究のため、と知らされたが、それ以上の

追及は許されなかった。

キマイラ研究所には医師も働いているからか、小さな診療所一つしかないバルツでは対応できない患者を受け入れ、治療していた。ある日のこと、アルバートとノアは大木に誤って下敷きになり重傷を負った。すぐに研究所の医師が駆けつけ、研究所に運ばれていた。意識不明の重体らしかったアルバートは一週間ほど昏睡したのち、帰らぬ人となつたらしい。

ノアはアルバートに庇われて一命を取り留めた。しかし、ノアは入院してたつた三日で研究所を出てきた。包帯を頭や腕に巻いて、とても退院を許可できる状態ではなかったのにも関わらず、ノアは帰ってきた。

その後、研究所の人間がノアを追ってきたが、ノアは研究所に戻ることを頑なに拒んだという。

「あたしは研究所でノアが何かされたと踏んでいるよ。状況を問いつめようと、抗議した者ももちろんいたさ」

しかし、キマイラ研究所はミルタニア国際連合（察するにミルタニアはこの世界の名前らしい）が運営する施設のため、逆らった者は監獄行きだと脅された。それ以降、バルツ村の人々は月に一度高額な税を払うよう課せられ政府から重圧を受けているらしい。

村人たちは理不尽な罰を受けたが、抗議すれば税金の額が上がる と容易に予想できたため、募つてゆく怒りをどうすることもできなかった。

怒りの矛先は息子のノアに向かった。

彼は毎日村人から執拗な嫌がらせを受け、耐えきれずとうとう村を出て行き東北の山に住むようになったという。

「あたしはノアを憎んでなんかいないさ。だけど、村人たちはもう、

ノアを仲間だと思わないでしょう」

ミルタニア国際連合　その組織の権力は大きいらしい。ノアは当時たったの十一歳。重圧は村人を子供に対してさえ非情にさせる。ルイージャはなんとかノアを村に連れ戻そうと試みたが、失敗に終わったらしい。

組織の力は一人の非力な老婆にとってあまりにも大きすぎた。

「お願い、ノヒト。ノアを連れて旅をしてほしい。ノアに広い世界を見せてやりたい」

「……」

俺は黙り込んだ。

ルイージャは懇願したが、俺には人を連れて何かあったときの責任がとれない。

旅はおろか、この地の常識さえ俺はわからないのだから。

「ノアにはあの狼がついている。けど、人の温もりを忘れてる」
「ルイージャさん、連れて行くことはできない。俺は何があっても責任はとれません」

俺はそう言って、膝の上で何時の間にか眠ってしまったっているウサギガメを見た。ルイージャは絵に描いたように落ち込んだが、仕方ない。

「でも、一宿一飯の恩義は忘れない。原因を直接解決すればいい」
「あんだ、何を言っているんだい？」

ノアにもルイージャにも俺は助けられた。当事者の彼らが解決できないのならば、部外者の俺ではどうだろうか。

「キマイラ研究所に乗り込んで、調べる！」
「なんだって！」

アルバートが、ノアが研究所で何を見たのか。そして研究所の真の目的は。何故子供一人にそこまでするのだろうか。キマイラ研究所はやましいことを抱えている。それを突き止めることができれば、何かが変わるはずだ。

ルイージャは村の住民だが、イレギュラーの俺ではどうだろうか？ もし捕まっても、バルツの人々に支障はないだろう。その考えを話すと、ルイージャは猛反対した。

「相手は政府だ！ 何されるかわかったもんじゃないよ！」
「でも、このままってわけにもいかねえし」

俺は何故ここにいいのかよくわからないままにいる。何らかのアクションを起こさなければ先へは進めない。このままバルツに居るわけにもいかないしな。

決してうまいこといけば研究所から金目のものが盗めるかも、とか考えているわけではない。

信じてくれ。

「じゃあ、あなたならなんとかしてくれると信じるわ」
「そのために俺に親切にしたんだろ？」
「ええ。でも興味本位半分さ」

ルイージャはそう言って悪戯っぽく笑う。

「興味本位？」

「この人は他と何かが違う　そう思ったの」

うーわ。

「……あれじゃないですか。俺がこのあたりの人間じゃないから、とか」

ルイージャの勘は大当たりだった。俺は焦ってそう返すと、ルイージャはそれもそうね、と納得の表情を浮かべた。

「応援する。そうだ、酒場のヴォルフなら知恵を貸してくれるかもしれない」

「わかりました。まかせてください!」

このとき俺は、現実はそんなに甘くない事を忘れていたのだった。

5：謎の二人組

白銀の世界にか弱そうな少女と、巨漢と言える中年の男が居た。少女は碧眼でポプの淡い金髪に、一部分だけ三つ編みをしている、雪と同化してしまいそうな白い肌の可憐な少女だった。白色の生地に淡い緑色の模様のインバネスコートを身にまとい、不思議な青い石が先についた杖を持った神秘的な風貌だ。

驚くことに側頭部に普通の人間の耳がついていない。まるで魚のエラのようなそれが耳の代わりについている。

まるで太陽の光を反射する海原のような鮮やかな青色だ。

その左耳に、杖の先端についた石と同色のピアスをつけている。

男の方豊満な肉付きが良すぎる体を、気候に似合わないノースリーブのベストで羽織り、迷彩柄の七分パンツをはいただけの寒そうな格好をしている。

ハゲていて、黒く目尻が垂れ気味な目をもった、愛想の良さそうな三十路くらいの風貌だ。

耳はいたって普通だ。

「どうしてなの！ここにメサイア様が降臨なさるって予言したじゃないの、あの魔女！痕跡一つないじゃない！」

儂げな印象がある美少女は、雰囲気とは正反対のきつい口調で憤慨した。

「落ち着けて、レイ。もしかしたらオイラたちの到着が遅すぎたんじゃないのか？　というかお前だって魔女だろ」

男は少女を宥めるように諭した。レイと呼ばれた少女は気を抑えることなく目を三角にして地団駄を踏んだ。

「やっと”奇跡”が起きたっていうのに！ あんたがデブでノロマだからよ、ゲオルグ……うひゃあ！」

「おい、どうした！？」

三回足を踏んだ後、レイは片足を大きな穴につっこんだ。どうやら昨晚に降った雪に表面だけ穴が隠されていたようだ。そこにレイは運悪く体重をかけてしまったらしい。

「手を貸して。 気が利かないわね！」

「どうやらノロマなのはオイラだけじゃないみたいだな？」

動きにくそうに暴れるレイを見て、ゲオルグは声を上げて笑いながら手を差し出した。

レイはゲオルグの態度に腹を立ててゲオルグの手を叩き、それからそれを支えにして穴から出た。

「何なのよ、この穴」

「ちようどヒト一人入れそうだな」

「あんたは無理よ」

「お前は身長が足りないんじゃないのか？」

「うるさいデブ」

「このチビめ」

お互いを貶しあっているが、この二人にとってはそれが普通だった。

ちようど青年くらいが収まりそうな穴を見て、レイが何かを思い出したようにアツと声を上げた。

「ここって、たしかメサイアの像が建てられていた場所じゃない？」

この極寒のワイール地方は大昔、今ほど雪は降らなかつたらしい。その時期にメサイア像が建てられ、現在では厚い雪に埋められているらしい。

近年、ワイール地方は温暖化の傾向にある。

そのため降雪量も積雪量も少ない。

近辺の村人が雪に隠れなかつたメサイア像の頭部を発見し、考古学者が検証した結果、ミルタニア最古のメサイア像だということがわかった。

しかし雪に埋まり、下手をすれば像が壊れる可能性があるため掘り起こすことは許されていない。大変貴重なメサイア像の存在は、バルツの村人以外、一部の者 それこそ政府の高位にあたるいわゆるエライ人しか知らされていない。

レイはそのメサイア像を検証した考古学者 魔族の女性の弟子であり、部下だった。

魔女の学者はある程度の未来が判る先見の能力を有しており、像のモデル、メサイアがこのワイール地方のバルツ村付近に、再び降臨するであろうと予言したのだった。

このことは、政府には伝えていない。レイたちは魔女に命じられ秘密裏にバルツにやってきたのだった。

政府にかぎつけられる前に、見つけてしまおうという意図だ。

「誰かがメサイア像を掘り起こした……？ 英雄ではなくて泥棒が居たみたいね。罰当たりだわ」

何故かメサイアを神聖視するレイが、重罪だといわんばかりに憤慨する。

「そつだな。いや、でも、まさか……な」

「何よ？」

齒切れ悪くぶつぶつ言い出したゲオルグを、レイは訝しげな表情で聞き咎めた。

「メサイア像自体が動き出した、とか？」

ゲオルグは少し口を開くのを戸惑って、自信なさげに突拍子もない仮説を説きだした。

レイは目を見開き、一瞬考え込むような仕草を見せたあと、鼻で笑う。

「そんなことあるわけないじゃない」

「メサイアが再臨すること自体有り得ないだろ。千年以上前の英雄が」

「でもあの女の予言はたしかよ。確かにそうね、有り得ないことじゃないわ」

レイは苦い顔で言った。彼女は師の能力は確固たる物だと信じている。身を持って体験しているからだった。

「なあ、レイ。聞いていいか？」

「何よいきなり」

「どうしてそんなにメサイアを絶対視するんだ？」

ゲオルグの問いに、レイは怪訝な顔をして彼を睨みつけた。そしてそっぽを向くところ答えた。

「あなたには関係ないわよ」

出てきたのは拒絶の言葉だった。

ゲオルグは彼女の態度を見て、答えてはくれなさそうだと判断し、深く追求はしなかった。

ゲオルグがレイについて知っていることは、大分昔からあの魔女の弟子であることと、調子はキツいが根は優しいことだけだった。

それでもゲオルグは、レイの事を仲間だと思っている。

彼女にどんな過去があるうとも。

「手がかりが少なすぎるわ。政府の配下だっというキマイラ研究所に行きましょう」

「どうするんだよ！ 政府に関係してるのはあの人だけでオイラたちは部外者だぜ？ 相手にされないんじゃないのか？」

あの人とは、レイの言う魔女のことだ。

魔女は優秀な学者で、非常に賢い。故に政府から絶大な信頼を得ている。

反面、謎が多く得体が知れない存在とも認識されているため、信頼されるが信用されていない。

「行ってみなくちゃわからないわ」

「ツテでもあるのか？」

ゲオルグの問いに、レイはあっさり返した。

「そんなものあるわけじゃない。とにかく行くわよ」

ゲオルグもレイも、魔女から多少は政府の情報を聞かされている。だが、あちら側はレイたちの存在を重視していないため、レイたちを相手にもしないだろう。

ただ、政府と一言でまとめるにしても部門が複数あるため、各々色合いが違はずだ。

キマイラ研究所は間違いなく技術部門の配下。そしてこのあたりに施設を構えているのなら、メサイア像の存在を知っているはず。

メサイア像を検証した考古学者のあの人の名を知っているはずだ。

しかし、相手にしてもらえたとこで、自分たちにとって不利益なのではないのか。

「それじゃあ、メサイアの存在を政府に知らせてしまっんじゃないのか？」

「聞き方に気をつければいいのよ」

「聞き方……？」

ゲオルグにはレイが何を考えているのかわからなかった。

説明を促すと、レイは呆れたようにため息をつく。

「メサイア像が盗まれた、協力してほしい。こう言えばいいわ」

「そんなこと聞いてどうするんだよ。そもそも研究所で何を聞く気なんだ？」

「わからないの？」

間違いなく自分より年上であるゲオルグを、あからさまに見下すようにレイは言う。

「私の読みではメサイア像を盗んだのは、研究所の人間よ！」

「はあ？」

ゲオルグは驚きのあまり、声を裏返した。

レイと行動を共にするなかで、このようなことは多々あった。なにかしらの疑問を、自分では考えられない答えでレイは解決してゆく。

魔女としての先見の才能の片鱗なのだろうか。

その命中率の高さからゲオルグは、レイの読みを頼りにしていた。

「でもどうしてそんなことを？」

「学者つてのは賢いけれど、貪欲な知的好奇心の持ち主なのよ。そんな奴らが最古のメサイア像をほっとくかしら？」

「それもそうだが」

キマイラ研究所というからには化学に精通しているだろうことは確か。しかし考古学とは分野は違うのではないのか。

そうゲオルグが唱えるも、レイは納得しなかった。

「学者なんて、みんな同じよ！」

レイはそう言うが、ゲオルグは納得がいかなかった。自分の直感が違和感を告げている。

「しかしなあ……」

「あなたの勘はアテになるけど、考えていたって仕方ないじゃない」

研究所はメサイア像の何らかの異変を知っているに違いない。

メサイア像の事について問えば、相手は何らかのアクションをとるだろう。動揺すれば読みは当たり。冷静に対応されたら、ハズレだ。

どちらにしても魔女に結果を報告し、今後の命令を待てばいい。

「まずはバルツ村の酒場に行きましょう。こついつところには自然と情報が集まってくるものよ」

「賛成だ。腹も減ったし」

「あなたは食べ物が目的でしょう」

ぐう。

腹の虫が鳴った。

「ちよつと!」

「いや、お前だろ」

鳴ったのはレイのお腹だった。

6：ファミレスみたいな酒場

レイとゲオルグが雪山に来た翌日。そしてノヒトがミルタニアという世界に踏み込んだ三日目の朝、ノヒトは目が昇って数時間後に目が覚めた。

ノヒトはルイージャの息子が昔使っていたという部屋を借りている。

彼女の息子はずいぶん前に都会へ旅立っていったらしい。

それでもこまめに掃除をしているのか、ホコリ一つ見当たらない。綺麗に整頓された部屋だ。

肩まで覆っていた毛布から出ると、ひんやりとした冷気が身を強ばらせる。ノヒトはもう一度毛布を被って眠ってしまいたい気分だったが、人様の家で二度寝などという怠惰した真似をするわけにはいかない。

立ち上がり、借りていたパジャマを脱いで畳むと、昨日ルイージャから貰った服を広げた。

都会へ出て行った息子が着ていたものらしい。

青いセーターに、濃紺のジーンズと白いベルト。そして灰色のフードつきのコートだ。サイズは合っている。ただ今時、>あちら<の街中で高校生がこの格好で歩いていたら浮くだろうとノヒトは思った。

文句は言わない。このミルタニアに来てから、ノヒトは見知らぬ人に迷惑をかけてばかりだった。

ノアから貰ったマントと灰色のコートを持って、居間に移動すると、すでにルイージャが朝食を並べているところだった。

エプロンを着けてスープやパンが乗った皿をテーブルに並べているルイージャの姿を見て、ノヒトはいつそう申し訳なさを感じた。

「すみません。手伝えなくて」

しまった。早く起きればよかった。

「いいのよ。好きでやっていることだからね。それに、ずっと独りでの食事だったから、嬉しくてねえ」

テーブルにはスクランブルエッグに焼いて脂がツヤツヤ光っているベーコン、コーンスープにロールパンが並んでいた。朝食はパンと牛乳で済ませるノヒトにとっては眩しい光景だ。

ノヒトはルイージャに感謝の言葉を述べると、手を合わせて我が身を使って自分にエネルギーをくれる食材たちに感謝した。ノヒトは少し多い朝食を全てたいらげた。

そしてやっとなげく。

ウサギガメはどこにいったのか。

「大変だわ！」

台所からルイージャが何やら慌てた様子で来た。手に何かを抱えていた。その手から緑色の甲羅から垂れる長くて白い耳が垂れている。

ウサギガメ？

「バスケットに寝かしていたのがいけなかったのかしら、体が冷たくなってるの！」

「えー！」

ルイージャのしわくちゃな手の中で、ウサギガメが頭を中途半端に甲羅にひっこめ震えていた。

そつと頭に触れると、信じられない程冷たい。

川から助けたときよりも冷えていた。

「もしかして、体温調節できてない？」
「どうでしょうー！」

少しでも温まるかもしれない。既に火が灯っている暖炉のそばにバスケットごと置いた。

「あの薬草、ありますか？ 効くかもしれない」
「たくさんあるわ。でも、上げていいのかねえ？」

珍獣の治療法など一般人が知るわけがなく、バルツィア草をすり潰して混ぜた小さな団子をウサギガメに食べさせるという、単純な治療法を施すしかなかった。

処置は正解だったらしい。ウサギガメの体調は良くなっていき、すぐに元通りの体温を取り戻していた。

「たぶん、定期的にバルツィア草を摂取する必要があるわねえ」

そう言っただけじゃ、ノヒトにバルツィア草の団子が詰まった袋を手渡した。

ウサギガメがどのくらいの頻度で薬草が必要なのか、観察しなければいけない。もしもの時にと、ルイージャはたくさん作った。

「何から何までありがとうございます」

ノヒトは早々にここを出て行くつもりだ。今更だが、いつまでも世話になるわけにもいかない。

ヴォルフという者が経営する酒場に向かうことにした。ウサギガメはバスケットに入れて連れて行く。灰色のコートを羽織り、バスケットとマントを抱えて立ち上がる。

「気にしなくていいさ。さあ、ヴォルフに会いに行くよ」
「え？」

一人で行く気満々だったノヒトは声を裏返し、目を丸くした。

「ここまで来て途中で見捨てるなんて、できないさ。年寄りだから研究所にまではついていけないけど、酒場までなら案内してやるよ。それに、あんた世間知らずのようだし」

ノヒトは嬉しさと、なにも返せないもどかしさに戸惑い、少しの間悩んだ後、ありがとうございます、とルイージャに頭を下げた。

マントだけだと完全に冷気は遮断されなかったが、コートは反対に暖かさをもたらしてくれた。

寒さに慣れていないノヒトにとって、それは大きな救いだ。

マントは着る必要がないと判断したノヒトは、ルイージャに貰ったカバンにマントをしまう。

いずれ、ノアに返すものだ。

ジョッキからビールの泡が溢れている絵の看板の下の入り口に、ノヒトとルイージャは入っていった。

ノヒトは中の光景を見て、首を傾げた。

コンビンくらいの広さの店内は、まだ明るいのに客がいた。しかも、子どもの姿もある。

酒場のはずなのに、まるでファミレスのような雰囲気があった。

「名目上は酒場だけど、みんなで食べれるような所が、ここにしかないんだよ」

ノヒトの疑問を察知したルイージャが言う。

バルツはとんでもなく田舎だから。ルイージャはそう付け足した。

「あそこにいるのが、ヴォルフさ」

ルイージャは店の奥でグラスに（たぶん）オレンジジュースを注ぐ男を指した。年はおそらく五十前後で、シャツのボタンはきっちり閉じている。整えられたカイズェル髭が特徴的な礼儀正しそうな男だ。

なんか、ありがちな風貌だなあ。

ノヒトは心の中で呟く。

「ヴォルフ」

ルイージャは男に近づき、カウンター越しに声をかけた。

ヴォルフらしき男はルイージャの声に反応してこちらを向いた。

「婆さんが、珍しいな。飲みにきたのか？」

「違うわい。アタシはもうそんなに肝臓が強くないさ」

「その少年に何かあるのかい？」

「えっ」

「さすがだ。察しがいいねえ」

ヴォルフの視界に入っていないだろうと、進んでいく会話をぼんやり聞いていたノヒトは突然話を振られ、言葉にならない声を出した。

「見かけない顔だな。息子が子供つくって帰ってきたのか？」

「滅多なこと言うんじゃないよ」

礼儀正しそう、というノヒトが男に抱いた印象は消え失せた。なかなか失礼な軽口をたたく。

ルイージャが言い返すと、ヴォルフは笑った。

気心の知れた仲なのだろう。温厚で親切な老婆だと思っていたが、軽口を叩くような友人がいたようだ。

友だち。そういえば宇野^のはどうしているのだろう。

宇野はノヒトの小学校からの幼なじみの少年で、中学校、高校まで同じという腐れ縁とも言える。

それに、家族。

父は酔って朝帰りせずにしっかり妹の面倒を見てくれているだろうか。

高校生になってから夜遊びする自分に対して、口うるさくなった家族が最近、疎ましくなっていた。だが、この世界に来て初めてそんな自分を恥じる。

帰りたい。

しばらくホームシックに陥っていたノヒトは、ヴォルフの声に現実呼び戻される。

「はじめましてだな、ノヒト。俺はヴォルフ。二人とも、まあ座れ。相談事があるんだろう？ 話を聞こう」

いつの間にか紹介されていたようだ。

ルイージャとノヒトはヴォルフに従い、カウンターの席に腰掛けた。

「ノアのことなんだ。なるべく小さい声で頼むよ」

「ほう？ まさかアンタ、まだノアを村に呼び戻そうと考えているのか」

「できればそうしたいんだけどね」

ヴォルフはノアを極端に毛嫌いしていないようだ。しかし、口振りからして非協力的だ。

ルイージャはいきさつをヴォルフに話した。ノヒトは口を挟まず、ヴォルフに出された水を飲みながら二人の様子を伺っていた。

ノヒトはこの地の者ではないこと。キマイラ研究所のウサギガメを拾ったこと。ノヒトが研究所にウサギガメを帰そうとしていること。ノアの父親についても含め、怪しい研究所を調べようとしていること。

これらのことをルイージャは軽くまとめた。

ヴォルフはそれを真摯に聞き入り、少しの間黙って考える素振りを見せた後、こう言った。

「なるほど。しかしノヒトはどうなんだ？」

「え、何がですか」

質問の意味を理解できなかった。ノヒトが聞き返すと、ヴォルフは居心地の悪い視線をよこした。

「お前になんの利益があるんだ」

「利益　ただ、ルイージャさんに恩があるから、返したいだけです」

「本当に？」

「本当です」

「あんた、何を疑ってんだい」ルイージャがヴォルフを叱る。

どうして研究所を探るだなんて事をしようと思ったのか、ノヒトにもわからなかった。

ただの気まぐれなのかもしれない。あいにくノヒトは自分に、無償で人を救うような良心はないと思っている。

目的を見つけ、前に進むしかない。

今のノヒトを動かしているのはそんな心情のみだった。

「研究所の人間は、ノアを捕まえようとしている。旅立たせるのは賛成だが、お前が政府の手のものだという可能性も捨てきれない
というのは、俺の考えすぎだ」

「わかってんなら言うんじゃないよ！」

ノヒトの緊張感はこの瞬間に切れた。

「あー、腹減った！」

「叫ばないで、見苦しい」

酒場に新たな客が現れる。ここは店なのだから別段珍しいことではないのだが、大きな男の声が目立って聞こえたのでノヒトは思わず振り返った。

入り口には随分大柄な男と、小柄な少女が何やら言い争っていた。

男は見ているだけでこちらが寒くなりそうな薄着で、メタボリツク症候群かと心配になるような豊満な体だ。そして毛の一本もない禿頭。目は小さく丸い。眉は八の字を描いている。不健康そうだが、温厚そうな顔つきだ。

少女はインバネススコートのフードをかぶっているので顔は何えな。覗く頬は白磁のように白く、赤い唇が映えていた。線の細い子だった。年齢はノヒトと同じか下だろう。

高く濁りのない可愛らしい声だが、言うことはキツく、刺々しい。全てにおいて真逆な二人組は、ノヒトたちが居るカウンターまで来ると、ノヒトの席より一つ開けて座った。少女はノヒト側に座る。ヴォルフが注文を尋ねた。

「酒はいい。安くて量が多い肉料理」と、男。

「枝豆」少女が言う。

枝豆かよ。

ノヒトは少女を見た。

先ほどより近いから顔つきがよくわかる。

柳眉な少女だ。鼻が高く、目はくりつととしていて大きい。やはり唇は赤く、潤っていて形がいい。虹彩は深い青色。フードから少しだけ溢れている髪は淡い金色だ。

こんな美少女は周りにいなかった。

工業を専門とした学校に通っていたため、女子は少ない。それに特別綺麗な女子はいなかった。

「マホ、牛の丸焼きと枝豆」ヴォルフが言う。

「はあい」

ヴォルフの呼びかけに応じてまた別の栗毛の少女　と言ってもノヒトより年上だろう　が奥からやって来た。手には枝豆がいっぱい乗った皿と、バスケットボール並みの肉の丸焼きが乗った皿を持っている。

慣れた手つきで少女と男の前に並べるとどうぞ、とそばかすのある愛らしい笑顔で言った。そして、また奥に引っ込んでゆく。

「話が戻るが、俺がお前たちにしてやれることはない。研究所のこととは自分でなんとかしろ」

隣の二人組がそれぞれ食べ出すと、再びヴォルフが切り出した。少女が一瞬こちらを見た気がした。

「そうかい。悪いねノヒト。アタシが協力してやれるのはここまでだよ」

「いや、ありがとうございます。自分でなんとかしてみます」
保証はないのだが。

「そっぴや、ノヒト。お前はどっぴやってここまで来たんだ？」
「東北の山の方で、ちょっとですね」

まさか雪に埋まっていたとは言えまい。

「東北の山!？」

「おい、どうした?」

少女がいきなり立ち上がり、こちらに詰め寄ってきた。盗み聞きしていたらしい。

隣で肉にかぶりついていた男が目を丸くして少女を見上げた。

「君……まさか」

意味深に呟く少女の真摯な視線が、ノヒトに突き刺さる。

少女が大きな声で荒々しく立ち上がったため、騒がしかった酒場は静まり返った。

「……え?」

注目的になり、何がなんだかノヒトにはまったくわからなかった。

7：容疑者

酒場でルイージャ婆さん、そしてヴォルフと別れを済ませ、俺は何故か謎の美少女とメタボリック症候群な男に連れられ、バルツ村を出た。

どうしてこんなことに？

俺は籠の中のウサギガメにルイージャからもらった赤い草　バルツ草をやりながらため息をついた。

「さっさと歩きなさい」

少女が俺を急かす。可愛い顔してかなり強烈な口調だ。俺は警察に補導される容疑者の気分になり、少女の威圧的な態度に逆らえないでいる。俺は何でも人の言うことを聞くようなお人好しではないが、行き先がキマイラ研究所らしいので大人しくついて行っている。傲慢な態度の女をたまに禿頭の男がフォローしようとするが、年齢はともかく力関係は少女の方が上のように、まったく役にたっていない。

未だかつてないほど自己中心的な女だが、女故に手が出せない。

女は傷つけない。それ、俺のモットー。

そうそう。名前を紹介し忘れてたな。

金髪碧眼の少女がレイ。肥満体質の禿頭がゲオルグだそうだ。

女は傷つけない。とか言っちゃってる俺だが、そんなことを言うてる場合ではなくなった。

レイとかいう女　メチャメチャ強え！

研究所があるバルツ村の南の渓谷に向かう途中、幾度となく得体の知れない怪物に襲われた。

怪物はポリクエに出てくるようなファンシーでちょっぴり怖いモンスターではなく　イオンハザードとかバイオレットドヒルに出て

くる障害のようにグロテスクかつホラーな外見の魔物だった。

俺は逃げ腰でノアから貰った剣を振り回していたが、レイやゲオルグは臆することなく魔物を撃退していく。

レイは神秘的な杖を取り出し、何やら呟くと巨大な炎が敵を襲い、一瞬で消し炭にした。

ゲオルグはというと、なんと素手で殴りつけたり蹴ったりして敵をノックアウトしていく。

二人とも、見た目に反して強かなようだ。

「うぶへあ！」

レイたちの豪傑っぷりを眺めていたら、イエティみたいな魔物にぶん殴られた。

仕方ないので、鞘から剣を抜かずに魔物を殴る。

実は殺すのには抵抗があった。例え相手が、俺を殺す気でいても。

「大丈夫かあ!？」

ゲオルグが慌てた様子で聞いてきた。

「たぶん……」

「足引つ張らないでよね! 燃えろ!」

レイが最後の魔物を片付けた。
すげーな本当。

魔法なんて実際にあったんだな。最初は感動した俺だったが、レイが目の前で魔法を使って敵を亡き物にしていくうちに恐ろしさを感ずるようになった。

”あちら”に魔法があったらかなりの脅威だっただろう。
人を簡単に殺せるし、殺しても証拠は見つからない。

あまり良いもんだと思えなくなっていた。

敵の大半はレイが撃退した。おかげで周囲に敵影は一切ない。一桁か二桁かっつてくらの数はいたのにな。

何で今まで俺が魔物に出会わなかったのかほとほと不思議だ。

そう感じるほどに生息する魔物の数は多い。

「さつさと行くわよ。容疑者くん」

「なんなんだよ？ 容疑者って！」

「とぼけないで」

さつきから同じように罵られているが、俺には何のことだかさっぱりだ。

レイが軽蔑を含む目つきで俺を睨んだ。

「メサイア像を盗んだのはあんたなんですよ！」

「！」

一瞬息が詰まった。レイがメサイアという単語を出した瞬間、ドクンと胸が強く脈打った。

やましいことがあるわけじゃない。俺にはなんのことだかわからない。

なのに、この胸の奥に潜んでいたようなひっかかりはなんだ？

「動揺したわね。肯定したも同然よ」

「ちげえよ！」

「言い訳しないで。私は不正と言い訳が嫌いなの」

立派な事をはっきり言うのはよろしいが、勘違いも甚だしいぞ！

「だいたい何なんだよ！ メサイア像なんて知らねーぞ！」

怒鳴るように訴えるも、レイに無視され無駄に終わった。げんなりする俺にゲオルグは肩を叩き、後少し辛抱しろと頼んだ。疑われている。

信用されていない。

それだけはわかった。

気分が良いものではないが、俺は無実だ。

それにこの二人なしでは研究所までたどり着けなかっただろう。

俺一人だったら、今頃魔物の胃袋の中だ。

むしろラツキーだったと考えればいい。

「あんたらは、研究所の人間なのか？」

気になっていた事だ。

答えたのはゲオルグだった。レイは見向きもしない。ま、いいけどな。

「オイラたちは、ある人に言われてここに来たんだ。というか、お前こそ研究所の職員じゃないのか？」

「ちげーよ！」

「もしくは研究所にメサイア像を運んでくるように頼まれた……とか」

「違うな。そもそもメサイア像ってのが何なのかわかんねーし」

「レイ！ どうする？ オイラたち人違いしちまったみたいだぜ」

何故か動揺しだしたゲオルグが、早口でレイに問いかける。

「そんなの演技に決まってるでしょ」

しかし一言で両断されてしまった。

俺はそんなゲオルグを見てちょっと切なくなった。

しばらく進むと雪景色に同化するような白い建物が見えてきた。バルツ村の家のような木製ではなく、冷たそうなコンクリートでできた建物だ。

正面にある入り口は鉄製の観音開きの扉。その隣には呼び出し音らしき赤いボタンがある。これさえなければ病院のようにも見える。

「ここが研究所ね。なんでこんな田舎に建てたのかしら」

レイが扉の真正面に仁王立ちして、建物を見上げながら言う。

「ってーかなんでこの女はいちいち態度がでけーんだよ。」

レイに対してゲオルグがぼんやりとした口調で答えた。

「オイラの推測じゃあ、ここの所長が雪遊びが好きなんじゃないかなあと」

「どんな所長!？」

不穏な話を聞いてきたばかりだからそうは思えんのだが。

「こんな小僧にメサイア像を盗ませるよう依頼するぐらいなんだから、お金に困ってるのかしら」

「小僧ってなんだよ！そして俺は無実だ！」

どうやら俺はキマイラ研究所の人間に、メサイア像を盗んでくるよう依頼された犯罪者ということになっているらしい。

「ま、そんなこと言ったられるのも今のうちよ」

レイは自信ありげにそう言いながら赤いボタンを押した。すると

ブーツという機械音が扉の向こうから聞こえてきた。

ピンポンとかじゃないのか？ 呼び出し音だよなこれ？

しばらく待っていると扉が内側に開き、中から黒髪の青年が出てきた。白いシャツに黒色のネクタイをピシッとつけた白衣の男だ。典型的な下っ端研究員Bさんといったところだろう。

しばらく個人的な奴らを相手にしてきたから、こういう普通さにはなんかホッとする。

「何かご用ですか？」

彼が丁寧な口調で問いかけてきた。うーん。思ったとおり対応は敵しくないな。てつきり

「関係者以外は立ち入り禁止なんとかかんとか！」とつつばねられるもんだと思っていた。

悪いイメージしかないのだがホントはそうでもないのか？

いや、まて。考えるんだ俺。こういう人畜無害そうな奴が、実は腹黒いこと考えてる組織の幹部で、下っ端のふりして俺たちに近づこうとするスパイだったりするんだ。

ってこの展開はポリクエの最新作にあっただな。

ゲーム一本に影響されすぎだろ俺！ 現実を見るんだ！

よく考えたらたかが下っ端Bに構えすぎだな。

「なにぼーっとしてんのよ！」

あれやこれや考えていたら、いきなりレイに頭を殴られた。しかも拳で。繊細そうなナリしてんのに、中身は獰猛なツキノワグマのようだ。

一日も経っていないのにゲオルグはこのやりとりに慣れてしまったらしい。フォローをしてくれなくなった。なんか可哀想なものを見る目で俺を見てくるぞ。

「見放された……」
「大丈夫ですか？」

下つ端研究員Bが心配そうに尋ねてきた。厳しい状況の最中に優しくされると涙を誘う。

「あなたも応接間に行きましょう。疲れているでしょう？」
「へ？」

「あなた聞いてなかったの？ 所長に会わせてくれるそうよ」

展開が読めねえ。いったいどう話をつけたらそうなるんだ。所長つて、一番偉い奴だろ？

「話は聞かせてもらいました。研究所から逃げ出した動物を連れ戻してくれたそうですね。ぜひ、所長から礼をしたいと」

あーなるほど。そういう展開ね。ウサギガメについて話したとき、レイは興味無さそうに聞いてたくせにネタにしゃがったのか。そのウサギガメはというと　！

「……」
「どうしたのよ。そのすごい汗」レイが言う。
「なんでもねえよ！」
「なんでそんなに怒ってんのよ！」
「怒ってません！」
「わけがわからない」

レイは首を傾げると白くて長い廊下を進み始めた。清潔そうな廊下だ。だが、かえって不気味でもある　ってそんなこと考えてる

場合じゃない！

ウサギガメ……どこ行ったアイツ！？

籠の中を覗いてみれば、もぬけの殻。あの珍獣はどこにも居ない。
あるのはさっきやったバルツ草の食べかす。

どーすんだ？

重役に会う前からピンチじゃね！？

8：バルツィア

やたら長い廊下を進み、曲がったり階段を上ったりしていたら、応接間らしい部屋についた。

内装は今までの病院のような味気ない雰囲気はなく、クリーム色の壁に、ガラス製の机を挟んで革の黒いソファアが対になっている。机の上には何故か、すっかり見慣れたバルツ草の束が皿の上に寝かせてあった。いったいなんのためなのか俺にはさっぱりわからん。黒いソファアには白衣の中年の男が座って赤い葉を弄んでいる。しかもなんか笑ってるような気がする。

青年の研究員が男に声を掛けた。研究員は男の部下らしい。

「所長、お客様をお連れしました」

「おお。ご苦労だったな。下がりなさい　ああ、そうだ、お茶をご用意してさしあげろ」

青年研究員は返事をする、軽く頭を下げて退出した。

なんか思ってたより対応が良いぞ。まさかお茶まで用意してくれるとは思わなかった。入ることさえ困難だと思っていたのに、目の前にはキマイラ研究所の最高責任者がいる。

だかしかし。会うためのネタのウサギガメはどこぞへ脱走しやがった。この事態にどう收拾をつけたらいいんだ。

所長に腰をおろすよう案内され、俺たちは一つのソファアに三人いっぺんに座った。ゲオルグのおかげが、かなりぎゅうぎゅう詰めた。俺の右隣にはゲオルグ、左隣にはレイが座っている。

キツイ！

所長は苦悶の表情を浮かべる俺に構わず、バルツ草を千切ったり丸めたりといじりながら話し出した。

「この赤い葉はバルツィア 通称バルツ草というそうです。ご存じですか？ ご存じですね？」
「はあ」

独特の乗りで問いかけてくる所長に、レイは若干引きながら答えた。

そしてなんと、所長はバルツ草を口に含んだ！

加工とかしてねえよな！？

所長は草を咀嚼してまた口を開いた。

「実はキマイラは不完全故に体温調節があまりできません。だから、キマイラたちには定期的にバルツ草を摂取させています」
「心配いりません。バルツ草はあたえてました」

内心、冷や汗をかきつつ返そうす。

「ありがたい。キマイラは暑い地域では汗を流さないし、寒い地域では毛皮があっても凍えて弱る。だから、所長はここに研究所を建てたのです。バルツィアの名産地だからね」

「所長はあなたなのでは？」

「私は所長代理。本当の所長は忙しい人でね、政府本部で走り回ってるんじゃないかなあ。おかしな話ですが、私も会ったことありません」

それ、もう所長じゃねえよな。

そう俺がつっこみかけた時、青年が紅茶を四つ運んできた。上司と部下以前に、部外者の俺たちが客のためかカップを置いた順番は、所長代理が最後だった。細かいな。

レイとゲオルグは ってか主にレイは研究所が重要文化財よくわからんがを盗んだ悪人の巣窟だと言うし、ルイーシャは研究所がノアの父親を殺

したとでも言うような話し方をするが、なんだかこちらの被害妄想のような気がしてきた。

いや、しかし。この紅茶に毒とか睡眠薬が混ざっていそうだ。手を着けないでおこう。非常に喉が乾いているが、我慢だ。

というか俺って警戒しすぎ？ スパイじゃないんだから気を張らなくていいか。いやでも、用心するにこしたことはない。スパイとまではいかないが、スパイっぽいことしようとしてるし。

ポリクエのしすぎだな。あれは今まで8つシリーズがあるが、全部の物語に最低一回はお茶とみせかけて睡眠薬だった！ って展開があるからな。

単調と思われるかもしれないが、シリーズごとにタイミングが異なるため、いつ騙されるかドキドキしながらプレイできる。

誰だ！ 今しようもねえとかいった奴。

もちろん、ポリクエの魅力はそれだけじゃないがな。

「ところで、あなた方は予知能力者の存在をご存知で？」

レイとゲオルグの空気が変わったような気がする。

このオッサンさつきから話が脱線しすぎだ。

本題に入られても困るがな。って俺呑気にしてる場合じゃねーし！
なんとかしないと。

どうすれば？

「予知能力者は正確に未来を予知しますが、いつでも詳細まで予知できるわけではありません。知ってますか？ 知ってますね？」

この人、聞いたことを勝手に肯定するのが癖なのか？

「何が言いたいのだよ」

あれ？ レイ？ 口調が馴れ馴れしくなってるのは何でだ。
洪面で所長を睨みつけ、冷たい声色で問うた。

所長は怪しくにっこり笑う。その得体の知れない奇怪さに鳥肌が
たつた。

何か 不穏だ。

「魔女アーデルハイドの手下の皆さんは、予知に従ってわざわざこ
こまでいらっしやっただようですね。でも、残念ながらこのワイール
地方に何も起きてませんし、我々キマイラ研究所は」

所長は顔全体を覆うマスクを被ると、白衣のポケットから何かの
スイッチを取り出し、押した。

青年研究員もマスクを被っている。

レイが立ち上がり、杖を握り呪文か何かを唱え始めた。ゲオルグ
は、慌てカップの紅茶をこぼした。

それより早く、白いスモークが部屋中をたちこめ、視界を白くし
てゆく。

ゴアースジェットみてえだなーと、薄れゆく意識の中俺は考え
た。

「我々はメサイアに興味はありません」

*

ここまで予想通りに事が進んだことはなかった。敵の罠にハマリ、
気絶しているうちに牢屋入りなんてありがちにも程があるが、実際
にその目にあうと、焦るものだ。

牢屋は薄暗いコンクリート剥き出しの三畳くらいのスペースで、それが十部屋はある。テレビでよく見る収容所とは違い、扉に格子のついた覗き穴とかではなく、壁代わりに格子がついた牢屋だった。丸見えじゃねえか！ 壁が三面しかねえ。

他にも何か居るのか、地響きのような獣の鳴き声が隣から聞こえてくる。

やはり現実が違う。

三人仲良く同じ牢屋なんて、都合のいい展開にならないものか。向かいの牢屋には、既に目覚めたレイがいた。

「やられたわ。まさか部屋ごと催眠ガスを充満させるなんて」

物凄く悔しそうに言う。

まあ。意外っちゃあ、意外だな。

「ゲオルグは？」

「あなたの隣よ。見えないでしょうけど。聞こえるでしょ？ この

イビキ！」

「イビキかよ！」

獣の鳴き声ではなくて、ゲオルグのでかいイビキだった。

「さっさと起きなさい」

レイが青いピアスのついた耳に手を添え、空いた片手をゲオルグが眠っているであろう方向にかざした。杖がなくなっている。よく見たら俺の持ち物が全部なくなっていた。

没収された！？

「ギヤーツ！」

壁を一枚隔てた先から、ゲオルグのけたたましい悲鳴がこだました。

この世で一番恐ろしいことが起こったかのような叫びをあげる。

「燃える！ 髪が！ 髪があー！」

「そんなものもとからないじゃない」

たしかにそうだ。

陰鬱な牢屋には、一定の距離を開けて並ぶ小さい炎を灯するうそく以外に明かりはない。レイがゲオルグに放った魔法のおかげで俺たちの近くははっきりと視認することができる。

見える範囲は限られているが、牢屋の通路はけっこう長いようだ。すぐ左には観音開きの脆そうな扉が、右には闇に包まれ先の見えないう延々と続く通路がある。

あれ？

「ってか魔法使えんならなんとかできねえのか？」

「なんとかしようとしたわよ。でもこの牢屋、反魔力呪術 魔法が使えなくなるような呪いがかかっている。今のはピアスに補助してもらったから使えたのよ」

よく見ると、レイの牢屋の格子には幾つもの傷がついていて、俺が寝ている間に足掻いた形跡があった。

格子は表面だけ、爪に引っかかれたような跡が残っているのみだった。

「杖さえあれば、こんなもの……いや、私の修行が足りなかったのね」

レイは悔しさと苛立ちが入り混じった表情で呟いた。
ギィ。

いきなり扉が軋み、開いた。固そうな靴の音が、こちらに近づいてくる。

レイは警戒して扉の方を睨みつけ、徐々に眉間のシワを深くしてゆく。

姿を表したのは、下っ端研究員Bさんだった。

右手にはロールパンが3つ乗った皿、左手にはカップが3つ乗ったトレイを持っている。

レイが口を開いた。

「何よ。こんな所に閉じ込めてどうするつもり？」

「すみません。僕は見ての通り命令に従うだけの部下ですので、皆さんがどうなるかわかりません」

「どうせ実験の材料にされるのでしょう」
「……………」

彼は答えなかった。その沈黙がレイの質問の肯定を明らかにしていた。

「その腰についてるのは牢屋の鍵よね」

「マジ!？」

彼の白衣には、たくさんの鍵がぶら下がっている。もしかしたら、俺たちの牢屋の鍵もあるかもしれない。

「皆さんを逃がすわけにはいきません」

「わかってるわよ。自分でなんとかするわ」

レイがそう言った瞬間、研究員に向かって炎の球体が放たれた。

ゲオルグに向けた魔法より威力はあった。

しかし、研究員は簡単に避けてみせた。

魔法は扉にぶつかり、破壊して消えた。

扉が壊れた衝撃で、近くのロウソクは役にたたなくなつた。

ほとんど薄暗いなか、扉から何か黒い影が侵入してきたのを見た。

「無駄な抵抗はしないほうがいいでしょう。おとなしく実験に貢献し　　うぐあっ！」

研究員の後頭部に黒い影が飛びかかり鈍い音をたてた。研究員は悲鳴を上げて倒れた。掃除がされていない牢屋のホコリが舞い上がった。

黒い影が、明かりの元に姿を現した。

「ウーツ」

間違いない。この動物の鳴き声のように聞こえない鳴き声の持ち

主は、この世界に来て三番目　　もとい四番目に会つた、

「ウサギガメ！」

今までどこにいたんだこいつ。

ウサギガメはどこか誇らしげに、気絶してしまつた研究員の腰から口で鍵を取つた。

甲羅で体当たりしたのだろう。

ウサギの瞬発力。カメの甲羅の強度。非現実的だがなかなかの強さだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1073e/>

復讐のメシア

2008年9月10日14時00分発行